

生徒会長の
セキ裸うな秘密

小説 天戸祐輝
挿絵 野村輝弥

立ち読み版



第一章 生徒会長の・ヒ・ミ・ツ・っ・!!

第二章 これが治療っ!!

第三章 こんなところで初体験っ!!

第四章 見せちゃう体育のあとはっ!!

第五章 ミスコン・熱狂・撮影会っ!!

第六章 最高の過激は彼女の部屋でっ!!

エピローグ

登場人物紹介

Characters



ほのさきゆのり 帆能咲由乃利

容姿端麗かつ成績優秀、品行方正な生徒会長。スタイルも良く、クールな性格も好まれ、学園で彼女を嫌う者はいない。昔、雨の中で道に迷っていた時に明哉に助けられた過去を持つが、それをきっかけに人に注目されると興奮するようになってしまった。

ひひろあきや 緋広明哉

子供の頃に由乃利を助けたのだが本人はそれが由乃利だと気付いていない。思い出したあとは、その性癖を満足させる相手をするようになる。



もう一度頭を振って妄想を打ち消し、下駄箱が並んだ玄関へと入る。

しかし、女子の下着姿の妄想は消えたものの、今度は太腿でヒラヒラとしているスカートに目が吸い付く。

(完全に病気だな、これじゃ……)

自分に呆れながらも上履きに履き替え、教室に向かう。

途中、階段を上る女子を下から覗いてしまい、白と水色の縞ショーツを見てしまったが、昨日の由乃利の下着ほど興奮はせずに済んだ。

「おはよっ」

挨拶をしながら教室に入っていく。

しかし、いつもなら朝のダルさで静まり返っているはずのクラスメイトたちが、やたらと騒いでいる。それも、男子女子問わず、教室に居る全員がだ。

「な、どうしたんだ一体?」

あまりの騒ぎ具合に、教室のドア付近で呆然と立ち止まってしまった。

喜んで騒いでいる男子たちと、コソコソと話しながら不思議がっている女子の様子が、正反對すぎて異常だ。まるで、新大陸か宇宙人でも発見したような感じである。

「おっ、来たな緋広。とんでもないニュースがあるぜっ!」

一人の悪友が明哉の姿を見つけ、喜々とした表情で話しかけてきた。

「どうしたんだよ一体? みんなこんなに騒いで」

悪友に尋ねる。教室中が騒いでいて、なにが原因なのか見当もつかない。

「まずはこれを見ろって」

悪友が携帯の写真を見せてきた。

「たく、まずは理由から話せって……っ!？」

携帯の画像を見た途端。あまりの驚きに言葉を失う。

彼の携帯には、みんなが憧れている学園クイーンの姿が映っている。しかし、それだけなら普通なこと。好きな子や憧れている女子を待ち受けにするやつも多い。

しかし、問題はそこに映っている生徒会長の恰好だ。

登校途中にでも撮られたのだろうが、彼女の着ている制服の布がかなり薄く、ブラウスやスカートの裾が極ミニになっていた。

露出の激しい制服のお陰で、携帯の中の生徒会長はピンクフリルのついた白いハーフカットプブラを透けさせ。スカートの裾からは、ブラとお揃いのハイレグ気味の白ショーツがチラリと見えている。

(ほんとうにこんな恰好で来るなんて……)

呆れていいのか。それとも、自分の言ったことを実践してくれた彼女に喜ぶべきなのか、明哉は携帯の画像を見たままだら然としてしまった。

「学園クイーンのかなんな恰好、めったに見られるもんじゃないぜっ。おまえも直接見に行つてこいよっ」

「うわっ!! ちよつと、引っ張んなつてっ」

自分の机に座ることもなく、悪友に引っ張られながら教室から連れ出された彼は、そのまま階段を上らされ、生徒会室がある四階にまで連れられていく。

(こ、ここはさすがに……)

思わず顔が赤面してしまう。

悪友に連れられた先は、昨日、由乃利のオナニーを見てしまい、半裸の姿で口奉仕までしてもらった場所だ。

当然、昨日の汚れたままではないことは分かっているが、さすがに抵抗がある。

「うわっ、すげえ人」

「なんでこんなに……」

悪友の言葉に、思ったままの感想を口にする。

平日の朝。いつもなら皆無と言っていいほど人がいない生徒会室の前に、携帯を持った男子たちが山のように押しかけていた。

しかも、みんな我を忘れたように白熱し、生徒会長を大きな声で呼んでいる。

「ちっ、出遅れちまったぜっ。じゃ、俺はもっという写真撮ってくるからなっ」

「写真って、おいっ」

返事をすることもなく、悪友が男子の山の中に突入した。

「たくっ、あのヤロ。でも、ほんとうに写真のような恰好を……」

携帯の画像を見せてもらったものの、自分の目で確かめたくなくなってしまった。

むさい男子が押し寄せている生徒会室の前。本来なら近づきたくもないその場所に、悪友を見習って彼も突入していく。

この熱狂した男子たちの姿を見れば、生徒会長がこの部屋の中に居るのは確かだ。しかし、あんな恰好を未だにしているのは信じ難い。

明哉は、エロ制服の彼女を見たいのが半分。そして、そんな姿を他人に見せたくない思いの半分で男子たちを掻き分け、もみくちゃにされながら生徒会室のドアの前まで辿り着いた。

「くそっ、いてえなまつたく。そんなに押すなつてのっ！」

「まつたく、生徒会長がそんな恰好で登校するなんて、なにを考えているんだっ！」

自分も押している一人だと忘れて、周りにいる男子に文句をぶつけた直後。ドアの開いた生徒会室の中から、女性教師の怒鳴り声が聞こえてきた。

そのあまりの声の大きさに、廊下で騒いでいた男子たちは一斉に静まり、凍りついたように中の様子を見つめてしまう。

「女として恥ずかしいとは思わないのか、帆能咲はっ！」

「はい、確かにこの恰好は恥ずかしいのですけれど……」

（げっ！ あの教師、今日は朝から由乃利を叱ってんのかよ……）

周りの男子とともに生徒会室の中を覗いた明哉は、昨日自分に説教をした女教師を見つ

け、思わず萎縮してしまった。

説教大得意といったその女教師の前では、薄くて裾の短い白ブラウスと赤いネクタイ。そして、紺の極ミニスカートといった制服姿の彼女が恥ずかしそうに立ち、少し頬を染めている。

「すげえ……」

つい、口から感想が出る。

直接見た学園クイーンの姿は、携帯の画像で見た時よりもエロティックだ。

白いブラウスは光の加減で透明と勘違いするほど透け、フリルのついたハーフカップブラに包まれた大きな肉果実が、その瑞々しさとお椀の形を強調するように揺れている。

生徒会室の窓が開かれていることで、裾の短いスカートはヒラヒラと捲れて鋭角な股布と、桃尻を包む白いショーツを露わにし、見ているだけで勃起してしまいそうなほどいやらしい。

白いニーソックスに彩られた美脚も、淡い色気を放つ太腿や付け根までみんなに見せ、男子たちが熱狂興奮するには十分すぎる姿だ。

(なんか、複雑な気分……)

なんとなく、嫉妬に似た気持ち湧く。

昨日、彼女の恥ずべき姿を見たばかりだというのに、今日は大勢の男子に下着まで見せている。そんな由乃利の姿に、なんとなく胸の辺りがモヤモヤし、意味もなく叫びたくな

つてしまふ。

「そんな制服を着たままなど許せんな、学園の風紀が乱れるつ。はやくいつもの制服に着替えなさいっ!」

女性教師の言葉に、男子全員ががっかりした表情を浮かべる。

「着替えですか? そうですね、着替えた方がいいのは分かります。ですが、今日は用意してきていませんので」

「なんだとっ! そんな恰好で今日一日いるというのかっ!」

生徒会長の言葉に、今にも掴みかかるような勢いで女教師が激昂した。

「申し訳ありません。いつもの制服はクリーニンングをしていますので……。それに、この制服を、そんなに卑下^{ひげ}にしないでいただけますか?」

「ふざけるな、そんなものを制服だなど……」

女教師がさらに怒り、ヒステリックな声まで出し始めた。それとは正反対に、由乃利は頬を染めながらも、どこか楽しげだ。

「ですが、これは新しい制服の調査のために着たのですが、サイズが合わなかっただけみたいですので……」

「うぐ……」

生徒会長の一言で、完全に勝負が決した。

彼女はこの学園の運営者で、世界経済の一翼を担う人物の娘だ。つまり、あの制服への

文句は、そのまま運営者への反抗とも捉えられる。

「そ、そういう事情なら仕方ない。しかし、認めるのは今日だけだぞ」

「はい。ご配慮に感謝いたしますわ。それに、家の者に頼んで、別の制服も用意してもらっていますので」

にこやかな笑顔の学園クイーンを見ることもなく、完全敗北した女教師が不機嫌そうな顔で生徒会室から出てきた。

「なにをしている。はやく教室に戻りなさいっ！」

さすがに、これ以上ここに居る敗北感に耐えられないらしく、女教師はそのまま立ち去っていく。

(あの教師のあんな顔、初めて見た)

昨日の自分の仇を、由乃利に討ってもらった。そんな気分になりながら、視線を生徒会室の中に戻す。

すると、学園クイーンがスタスタとドア近くまで歩き、下着の透けさせたエロ制服姿をみんなに披露してきた。

「お騒がせしてごめんなさい。もう話し合いは済みましたので、わたくしに御用のある方は、順番にお聞きいたしますわ」

(この笑い方は、完全に喜んでるな……)

頬を染めながら男子全員に笑みを向ける由乃利の姿に、明哉だけが、その彼女の笑みが



視線で感じているものだと分かった。と同時に、少し呆れてしまう。

「あの、どなたから……」

小首をかしげ、集まっている男子の用件を聞こうとした彼女のスカートが、窓から入ってきた風で少しひるがえり、脚の付け根とショーツの半分ほどが露わになった。

女肉のふっくらとした膨らみや、そこに浮き出した縦皺。そして、後ろからは桃尻の形までシルク布に浮き出した学園クイーンの姿に、男子たちは一斉に携帯のシャッター音を鳴り響かせていく。

「な、なんですのみんな……。どうして写真なんか……。んう……」

幾多の携帯カメラに撮られた由乃利は、さらに頬を染めて太腿を擦り合わせ、恥ずかしそうに熱い吐息を吐き始めた。

※

朝の騒動から四時間ほど経った昼休み。

今日は休み時間になる度に教室から男子の姿が消え、三学年の生徒会長のクラス前は、人だかりの山になっていた。

「そんなに見に行かなくても……」

呆れた口調で呟いてみるが、明哉は少し苛立っている。

朝に学園クイーンの姿を見てから、彼はそのあと一度も彼女を見に行つてはいない。見せたくない由乃利の透け下着姿が、今も大勢の男子に見られているのだ。彼女に好意

を持つている彼には、耐えられない状況である。

「緋広、緋広、緋広っ。見ろこれ見ろこれ見ろこれっ！」

どうやら学園クイーンのところに行ってきたらしい悪友が、興奮冷めやらぬといった表情で教室に戻ってきた。

「たくっ、うるさいな。そんなに何回も呼ぶな、一度でいい一度でっ」

「んなことあどうでもいい。すごいモン撮れたぜっ！」

完全に明哉の返事を無視した悪友が、興奮しながら携帯の画像を見せてくる。

そこには、透けたブラウスと肉果実を包むセクシーブラが映り、ブラカップの縁から薄ピンクの乳輪まで見えている。しかも、そこに映っている彼女の頬は少し染まり、かなり嬉しそうだ。

「なっ!？」

「これぐらいで驚くなつて。こっちはもつとすごいぜっ」

驚いている彼を横目に、悪友が興奮しながら画像を切り替えた。

携帯の画面には、またもや生徒会長の姿が映り、階段下からのアングルでピンクフリルのセクシー白ショーツと、シルク布に浮き出した淫部や桃尻の形まで見えている。

「次は……」

「悪い。行ってくる」

続けて次の画像を見せようとした悪友を振り払い、机から離れていく。

「な、なにか御用ですか?」

エッチとは違う緊張で心臓がドキドキする。肉幹は彼女の中でピクピク震え、自然と両手をブラウスの裾から中に差し込み、美峰乳に指を喰い込ませながら、乳首だけを指の間で転がしてしまふ。

明哉以上に、大事な部分を見られるかもしれない羞恥に興奮している由乃利は、大きな肉果実越しにも心臓の鼓動が揉んでいる彼の掌に伝わり、緊張した膣壁と褻がキュウキュウと収縮して、脈動する肉幹を締め付けてきた。

「生徒会長……あの、生徒会の予算のことなんです?」

どうやら、話しかけてきた女子は生徒会の経理担当らしい。一枚の紙を生徒会長に見せながら、なにかを尋ねている。

「そ、それはですわね……今度のミスコンで……きゃんんっ!!」

話している途中、悪戯心が芽生えた明哉が胸を揉みながら腰を突き上げた途端、生徒会長がこらえられずに喘ぎ声を張り上げた。

同時に、彼女に話しかけていた女子も、周りを歩いていた生徒たちと一緒に学園クイーンを見つめてくる。

「あ、あの、どうかしたんですか?」

「な、なんでもありませんわ」

心配するような声に、平然をよそおって彼女が答えた。

だが、明哉は悪戯をするのが面白くなっていた。

肉幹がビクビクと脈動しているにもかかわらず、彼女をもっと恥ずかしくさせようと腰をグラインドさせ、挿入したままのペニスで膣内を掻き回してしまう。

亀頭は膣壁を擦るように彼女の中で円を描き、ジュリユジュプと泡立つような音を車内に響かせてしまった。

「そ、その予算……予算は……ふあああ……」

初めて受ける刺激に、我慢する方法が見つからないらしい。

生徒会長は經理の女子に説明もできずに濡れた声を奏で、その美貌を蕩けさせていく。車内には泡立つような音が鳴り続け、腰をグラインドさせて膣内を掻き回す度に、彼女の唇から唾液が零れてくる。

「せ、生徒会長？」

あまりに淫らな由乃利の姿に、尋ねている女子が頬を赤らめた。

冷房が効いているにもかかわらず、車内から出ていくムツとした淫熱。それと、淫らな音と匂いに興奮し始めてしまったようだ。

「(ほら、はやく答えてあげなよ)」

「む、むり……ッ、ですわ……こんな状態で……はふッ！」

「(なら、動きを元に戻してあげる)」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ!

「ふあッ、あッ、あッ、ダメこんな……さつきよりも感じ……つつッ！」

小声で話し、動きを元の突き上げに戻した途端。もう喘ぎをこらえることなどできなくなつたみたいに、彼女が濡れた声を奏でた。

膣内を掻き回してからの突き上げで、さらに感じてしまったらしい由乃利は、經理の女子の前で肢体を上下させ、濡れた挿入音を秘孔から鳴らしてしまう。

「せ、生徒会長っ!？」

「ご、ごめんなさいッ……はうッ、あッ、そッ、それは、それはあした話すから……今日は……ふあんんんッ！」

「は、はい……」

我慢できずに彼女を追い払った由乃利が、パワーウインドウのスイッチに指をかけながら再び桃尻をくねらせ、肢体の上下運動を激しくさせてくる。

「だめだよ、窓を閉めたらっ。そこから上半身を出して、生徒会長として、みんなに下校の挨拶をしなくちゃ」

「ッ……あッ、で、でもッ……それでは……ああッ！」

しかし、それをとめた彼は、拒むことなど許さないとといった感じで彼女を動かさず、無理やり後背座位からバックの体位に変えて、彼女の上半身を車外に出させた。

両手は当然ブラウスの中から引き抜いて学園クイーンの細腰を掴み、さらに膣奥を突き刺せるように引き寄せる。

「深いッ……深いですわッ……奥に……」

本格的なバックの体位に変えたことで、今まで触れる直前だった子宮口が切っ先にぶつかってきた。

膣よりも小さく感じる最奥の入り口は、腰を突き入れる度に亀頭が突き当たり、鈴口だけを吸ってくるような刺激で、精液が駆け登っていく尿道をくすぐってくる。

「ふあッ……もう……もう声が我慢できま……」

「いいの由乃利? 声出したら、みんなにエッチしてるのがバレちゃうよ」

その声を聞いた彼女が、慌てて唇を噛み締めた。さすがに、エッチを見られるのは恥ずかしいらしい。

しかし、責める明哉にとっては問題ない。

桃尻を見ながら、ペニスが出入りする秘孔まで見られるバックという体位に、彼は思うまま腰を前後させて動き、パシッパシッという肌がぶつかり合う音を鳴り響かせてしまう。「ほら、はやく挨拶しないと」

「んああッ……はあはあ……み、みなさん……んッ! 気をつけて下校してくだ、ください。最……最近是不審者が多い……ので、あッ、危なくなったらすぐに逃げて……んうッ!」

彼に言われて、生徒会長は前を通りかかる生徒に挨拶し始めたが、確実に言葉がおかしい。息遣いが荒く、濡れた言葉の端々が途切れている。下着をつけてない胸元も大きく揺れ、みんなが艶めかしい学園クイーンの姿をよく見ようと、歩く速度を抑えた。

「見てるよ由乃利。みんな、由乃利の喘いでる姿を見ているよ」

「そ、そんな……ひゃうううッ！ わた、わたくしを見て……見てますの……あんッ！
で、でもダメですわ……エッチなことを考えたらダメ……だから……ンああッ！」

それは無理だろうと思いがちでも、肉のぶつかり合う音を車内に響かせ、子宮口に切っ先を叩き付けて、生徒に挨拶をする彼女を喘がせ続ける。

見られたくない、見せたくないと思っていた気持ちは、いつしか注目を集めている美少女学園クイーンとエッチしているという優越感に変わっていた。

秘孔に入れさせる肉幹は、ビクビクと脈動しながら太くなり。膨らんだ亀頭が幾枚もの膣壁を掻き捲つては、再び戻つて激しく膣壁を擦りあげていく。

「生徒会長、なにかへんじゃねえか？」

「なんか、勃つてきちゃいそうだぜ」

「ダメ、わたし、恥ずかしくて見れないよ」

男子と女子の入り混じった声が聞こえた途端。膣壁が肉幹にきつく絡まり、膣全体が波打つように蠕動してきた。彼女の肌は大量の発情汗を吹き出し、肉幹を啜えた秘孔からは、泡立った愛液が大量に溢れてくる。

「ふあッ！ あッあッあッ……ンはああああッ！ もうダメですわ……こっ、こんな、
こんなに見られたらわたくし……わたくしッ！」

見られることで感じる彼女が、エッチ中にこんなに多くの視線を集めてしまったのだ。

もう快楽を抑えられるはずがない。

由乃利は少し開けていた車の曇り窓をさらに下げて両手で掴み、四つん這いの体勢になった桃尻を左右に振り乱してきた。

ペニスは膣内を掻き回すように亀頭で膣壁を擦りまわり、痛いほど根元を締め付ける秘孔が激しく蠢きながら、大量の愛液をしぶかせている。

「もっ、もういいですわッ! 激しくしてッ……激しくわたくしを……ひゃんッ!」
「くおおっ」

ジュプッ! ジュプッジュプッジュプッ!

彼女が言い終わる前に、明哉は腰の速度を速め、柔らかい桃尻に激しくお腹を叩き付け始めた。肉のぶつかり合う音は車外にまで届き、長い栗髪を振り乱して喘ぐ生徒会長を、下校中のみんなが熱い視線で見つめる。

「あふッ! ひゃッ、んッ、あッ、すごいですのッ……身体中が熱くて……はあはあ……もう……もおううううううッ!」

勢いよくペニスをピストンさせ、強く子宮口を突き上げる度に、秘孔が千切れるような力で根元を喰い締めてきた。膣壁は一気に奥へと蠢いて肉幹を扱き、子宮口が切っ先を飲み込むように吸引する。

限界まで膨らんだペニスには、破裂してしまうような痺れと脈動が走り、尿意にも似た焦燥感が全身を駆け巡っていく。

「みんなの前で出してあげるよ、由乃利っ！」

「んうッ、み、みんなの前でッ!!」

車内がよく見えてないとはいえ、人前で膣内射精される。そのことに驚いた彼女が、青い瞳を見開いて長い栗髪を振り乱した。

しかし同時に、そのことでさらに注目を浴びられるという思考に直結したらしい。幾多の生徒を瞳に映しながら、車外に出した上半身の背中を仰け反らせ、みんなに見せるように制服の下の大きな肉果実を揺らす。

細い腰は、車内で激しくくねつても桃尻を左右に振りまくり、膣内へのピストンを繰り返す明哉のペニスに、気が狂うほどの刺激を与えてくる。

「すごっ、これもう……俺も……くうっ！」

もう自分でなにを言っているのか分からない。

ただ彼女の膣が与えてくれる強烈なムズ痒い焦燥感に腰を動かし、頭の中を真っ白にさせていくだけだ。ペニスは切っ先からプシュプシュと先液を噴き出し、生徒会長の膣内に自分の体液を染み込ませてしまう。

「ふあッ、あッあッあッあッ、もうダメ……もうダメですのッ！ 見られて……身体がもう……ふあんんんんんんんんんんんんんんんんんッ！」

絶頂に昇り始めた学園クイーンとともに、明哉のペニスにも白濁が登り始めた。肉幹は脈動を繰り返し、子宮口を突き上げる切っ先が鈴口を広げていく。



頂を告げながら唾液まで零し、昂揚した頬に伝わせていく。

白いブラウスと赤いベストに包まれた上半身は、弓なりのまま硬直痙攣を繰り返して震え。二枚の布越しにもかかわらず浮き出ていた乳芽が、乳輪まで陰影させて絶頂を告げ続ける。

隠す布のない尻尻は、少し大きな尻タブを左右に緩ませながら薄赤い尻孔まで晒し。その下ではペニスを啜えた秘孔が、肉幹を吸うように蠢いて愛液を垂らした。

「くあっ……おっ……はああはああ……、全部出ちゃった……」

「ひやうッ……あッ……あッ……んひッ……はああはああ……」

膣内にすべて放出し終えたと同時に、肢体の痙攣硬直を終わらせた由乃利が、外に出していた上半身を車内に戻しながら、愛液の染みがついてしまった座席に崩れ落ちた。

人前での絶頂に、彼女の美貌は真っ赤に染まりながら大量の汗を伝わせ、長いまつげをフルフルと震わせながら、瞳の端から歡喜の涙まで流している。

(すごい綺麗だ……、でも)

ウイイイイイイイイイイイン………。

絶頂した彼女を心の底から美しいと思いつつも、明哉は下げているパワーウインドウのスイッチを押し、スモークガラスをあげていく。

こんな綺麗な彼女を、これ以上他人には見せたくない。

「明哉……、今日は……今日はすごかったです……んふっ！」

いた彼女は、必然と彼の上で四つん這いの体勢になってしまふ。

「こ、これでどうするんですの……っ!!」

彼女が言い終わる前に、明哉はショーツのクロッチを退かしてふっくらとした女肉に引っかけ、薄っすらとした草むらと淫唇が広がった淫部を晒しださせる。

「こんなに濡れてるんだ、めちゃくちゃにしても……くちゅ」

「ふぁひっ! あっ……はふううっ!」

目の前でこんなに淫らな部分を見たら、もう黙ってられない。

口内射精で落ち着いた彼は、そのまま由乃利の淫部に顔を埋め、秘粘膜より少し硬い秘孔に舌先を走らせた。

「だ、ダメ……そんなところを舐められたらわたくし……」

そんなことを言われても、もうやめられない。

舌先で秘孔の縁をなぞる度に、白いニーソックスに包まれた太腿がプルプル震え、彼女の上半身が小刻みしながら彼の上に崩れ落ちてくる。

下を向いても形の崩れない大きな肉果実は、明哉の身体で丸くなって潰れ、乳首が柔らかな肉房の中で転がり始めた。

赤く染まった美貌は、彼の股間近くで荒い呼吸を繰り返し、口元には今にも唾液にまみれたペニスに触れようとしている。

「由乃利、さっきみたいに」

「えっ、はあはあ……分かりましたわ……チュパっ」

彼女の目の前で何度かペニスを突き上げると、彼女がそつと唇を被せてくれた。

生暖かな空間で舌を絡められたペニスには、再びムズ痒い焦燥感が走り、無意識に腰を突き上げて口腔を貫いてしまう。

シックスナインの体位で互いの性器を責め合う画像は、そのままカメラの向こうに居る人たちを興奮させ、大量の文字が大型モニターに流れてくる。

「レロ……すごいよ由乃利。俺のを入れる場所がこんなにヒクヒクして、中で褻がウネウネしてるのまで見えるよ」

「言わないで明哉、言われるのはイヤですわ……」

胎内の様子をネットの向こうに居る人たちにまで教えた途端。フェラしていた学園クイーンが、真つ赤な美貌を左右に振って恥ずかしがった。

しかし、本気で嫌がってはいない。

言葉で責められた肢体は小刻みに震え、秘孔からは濃い愛液が溢れて太腿に流れ、ニーソックスに染み込んでいく。

明哉の言葉で、見ている人たちは彼女の淫部の映像に切り替えたらしく、モニターが一瞬で卑猥な言葉で埋め尽くされてしまった。

「んうあつ、みんなが……わたくしのアソコを……お腹の中を覗いてますのおおのおおおおっつっつ！」

画面に流れてくる文字を見た由乃利が、一気に視線を淫部に感じて嬌声を張り上げた。ヒクついていた淫唇は、見られる刺激で大きく広がってサーモンピンクの秘粘膜と蠢く秘孔を晒し、大量の愛液が吹き出すように彼の顔にかかってくる。

「すごい量だよ。もう限界?」

「限界ですの……もう限界ですのっ!」

指先で愛液を溢れさす秘孔の縁を辿りながら訊くと、間髪入れず答え返してきた。身体を駆け巡る刺激に、もうフェラする余裕もないようだ。勃起した肉幹に寄せた唇は息をするだけで、亀頭に被せてくる予兆もない。

「なら今日は上に乗って。みんなに由乃利の一番エッチな姿を見せるんだろ」

「はふっ……ん……ああ……上に……」

明哉の言葉に従うように、生徒会長がヨロヨロと上半身を起こして体勢を変えた。

【騎乗位で合体 wwwwwwwww】【エロエロ美少女下からブッスリ】【自分から挿入するとは、この子淫乱すぎっ】【やっ挿入 でも下着邪魔】

「ぬ、脱ぎますわ……」

つい見てしまったモニターの文字に答えた彼女が、そつと腕を背中に回してズリ下げてストラップレスブラと赤いネクタイを外し。そのまま両手をスカートの中に差し込んで、ビチャビチャに濡れていたショーツまで引き下ろしていく。

多重画面のモニターには、下着を脱ぐ学園クイーンの姿が余すところなく映され、興奮

した文字で埋め尽くされている。

「明哉……」

見せながら下着まで脱ぎ捨てた彼女が、吐息混じりの声で呟きながら、ゆっくりと股間に跨ってきた。

ゴクツ……。

前を開いたブラウスとミニスカート。そして、ニーソックスだけで自分を跨いだ彼女の姿に、自然と喉が鳴ってしまう。

今の彼は、スカートを真下から覗いているのほとんど同じ状態だ。

今カメラに映っていない愛液にまみれた秘孔も、ピツタリと肌に張り付いた草むらも、包皮からピョコつと剥き出た女芽も、そのすべてが見えている。

「そ、そんなに見ないで、明哉の視線が一番……」

「ごめん」

ついあやまつてしまう。が、視線が彼女から離れることはない。

「い、入れますわ……はうっ!? んあああ……」

ジュプッ! ジュプジュプ……。

恥ずかしがりながらも、ゆっくりと桃尻を下ろしてきた生徒会長が、秘孔を亀頭に被せるようにしてペニスを飲み込んできた。

長い愛撫とカメラからの視線で完全に柔らかくなっていたそこは、濡れた音を鳴らしな

がら肉幹を包み。お尻側のカメラに挿入シーンを見せつけるようにして、彼の上に肢体を下ろしてくる。

「ふぁ……あふつ……んっ……はふうううううううううううううッ！」

ジュブ……ジュブジュブジュブジュブッ！

肉幹を半分ほど飲み込んだ瞬間。膣内に受け入れたペニスの感触に耐えられなくなった学園クイーンが、白い喉を仰げ反らせながら一気に股間の上に落ちてきた。

彼女の嬌声とともに、一気に膣内に飲み込まれてしまったペニスには無数の膣襞が絡まり、舐めるようにエラ裏にまで入り込んで肉幹を刺激してくる。

この数日間で完全に明哉のペニスに馴染んだ膣内は、まるでその形を覚え込んだように膣壁をうねらせて肉幹を締め付け、下りてきた子宮口が亀頭に突き当たった。

「あふぁッ、あふッ……当たってますの……奥に当たって……ひゃうッ！」

お椀型の美峰乳を見せつけるように張った生徒会長が、下腹部を両手で押さえながら、ペニスが子宮に当たっていることをみんなに教えている。

細腰を下ろしたことで裾を持ち上げたミニスカートの二人の接合部を何台ものカメラに映し、秘孔が歪んで肉幹の根元を締め付ける様子を披露した。

「くぁっ、いつもより締め付けて……」

「ひふッ、んぁ……いっぱい……いつもよりいっぱいになってますのッ！」

ペニスをすべて膣内に収めた由乃利が、桃尻を股間に乗せたまま身体を震わせた。

ネット中継で大勢の人たちに見られた興奮が、膣内の動きをより激しくしているらしく、彼女は呼吸に合わせて大きな胸を上下させることしかできない。

「動く、動くよ由乃利。めちゃくちゃに突き上げてあげるからっ!」

ズリュツッ! ジュプツ、ジュプツ、ジュプツ、ジュプツ!

「ふあああッ、あうッ! ま、待つて……少し待つ……はふッ!」

過剰に感じている彼女と同じように、その膣に締め付けられている明哉だつて腰を動かすことを我慢なんてできない。

なにもしなくても奥に向かつて蠢く膣壁と膣壁に刺激されたペニスには、内部までくすぐられているようなムズ痒さが走り、自然と腰を突き上げてしまう。

両手は大きく揺れていた肉果実を下から驚掴みにしてしまい、秘孔を突き上げながら揉みしだいてしまった。

「ず、ずるいですわ……あうッ! 待つてつて言つてるのに……はげし……激しくするなんてッ!」

感じすぎる身体の反応に、由乃利が濡れた声で文句を言ってくるが、もう腰はとめられない。

胸を揉みながら突き上げる肢体は、明哉の股間の上で何度も揺れ動き、広い部屋中に淫らな挿入音を鳴り響かせていく。

多重画面に流れていた文字は、彼女の姿をよく見ようとして一度収まり、すべての画面

に、肢体を突き上げられて嬌声を奏でる学園クイーンの淫姿が映し出された。

「ふぁッ、あッ……わたくしも……わたくしもおかしくなってしまうそうですわ……あふッ！ 身体が燃えているようで……お腹の中がもう……」

感じすぎる肉体に慣れ始めた彼女が、さらに強い刺激を求めて突き上げに応えてきた。

明哉が腰を突き上げるタイミングに合わせるように、彼女も桃尻を跳ねさせてペニスが抜けるギリギリまで肢体を浮かせ、股間に淫部をぶつけるように肢体を落としてくる。

部屋には濡れた挿入音がさらに大きくなって響き、カメラのマイクにまで拾われて、ネットの向こうに流れていく。

「ひゃうッ！ いい……これいいですのッ！ はふッ、あッ……お腹の中が全部感じて……アソコが溶けてしまいそうですわッ！」

亀頭がすべての膣壁を掻き捲って秘孔まで戻り、再び激しく子宮口を突き上げる刺激に、由乃利が腰までくねらせてきた。

彼女が腰までくねらせたお陰で、亀頭は膣壁に激しく擦れながら子宮口を叩き、いつ射精してもおかしくないほどの焦燥感を走らせてくる。

身体の上で上下する肢体は、感じすぎるエッチで大量の発情汗を乳芽から飛び散らし、秘孔からは留まることを知らない愛液が溢れて、彼女のベッドシートに染み込んでいく。

「くあつ、やばい……出ちゃいそうっ」

肉幹を痺れさせてきた刺激に、再びペニスに射精感が押し寄せてしまい、奥歯を噛み締

めて耐える。しかし、腰の突き上げはとまることを知らない。

彼女の秘孔は、抜くことを許さないとばかりにペニスを強く喰い締め、ペニスの出入りとともに膣口から内壁まで捲りだして、明哉を射精へと導く。

「い、いいですわ明哉ッ、出して……いつでも出してッ！」

肉幹の脈動に気づいた彼女が、肢体を上下させながらいつ射精してもいいと叫ぶ。しかし、ここまでペニス全体を刺激してくれる膣に、そう簡単には射精したくない。

それに、このエッチはネットで中継されているのだ。彼女よりも早く射精してしまえば、男としてのプライドが傷ついてしまう。

「まっ、待って。体勢を変えるから」

「んう……はあはあ……どうして……」

股間の上で跳ねていた肢体を押さえ、そのまま転がるようにして騎乗位から正常位に変える。

「こ、これで出すんですの？」

「まだまだ、もつと恥ずかしい姿を見せてやろうよ」

「え、ちょ……きやうんんんッ!!」

正常位から強引に彼女の両脚を掴んで肩に担いだ瞬間。生徒会長が慌ててスカートの裾を押さえた。

女の子としての条件反射だったらしいが、そんなことをしてもなんの意味もない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!